

九州産業大学 正員 崎山 正常

1. まえがき 河口貯水池計画などと相まって地下密度流的に検討しなければならない問題はいろいろあるが、本報では図-1に示すような暗きよから淡水を浸透させて貯水池内に浸透してくる海水を遮断しようと云う一案について、図-1に示す特異点EおよびFが一致した状態での検討を行なった。この状態ではもちろんその外側からの海水の浸入が考えられるが、ここでは特異点EおよびFが一致しない状態すなわち海水を完全に遮断した状態の前提として取扱うわけであるから淡水浸透領域外の海水は動いていないものと仮定する。そうすると流れは図-2に示すような二次元対称流となる。このような暗きよ自体、構造または施工のうえからいろいろ困難な問題点があるかとも予想できるが、海水浸入防止対策としてはかなり確実な効果が期待できるものと考える。第二報では特異点EおよびFが一致しない二次元非対称流について検討する計画である。

2. 解析 2.1. 基礎方程式 速度ポテンシャルを ψ 、流れ関数を Ψ 、透水係数を k として他は図中の記号にしたがうと Schwarz-Christoffel の定理と図-3に示す境界条件とにより

$$\psi = \bar{\psi} + i\bar{\Psi} = k(H_s + H_u + R) + N \int_0^t \frac{dt}{\sqrt{-t} \sqrt{1-t} \sqrt{d-t}} \quad \dots (1), \quad \text{また浸塙境界面の任意点における速度ポテンシャル} \psi_s = \bar{\psi} \{H_u + (1+\varepsilon)H_s\} - k\varepsilon y, \quad \dots (2), \quad \text{ここで } \varepsilon = (\eta_s - \eta) / \eta_s, \quad \dots (3), \quad \eta_s \text{ は海水比重, } \eta \text{ は淡水比重}$$

となるから Zhukovsky 関数化は

$$\Omega_1 = \bar{\psi} + k\varepsilon y, \quad \Omega_2 = \bar{\Psi} - k\varepsilon x, \quad \Omega = \Omega_1 + i\Omega_2 \quad \dots (4)$$

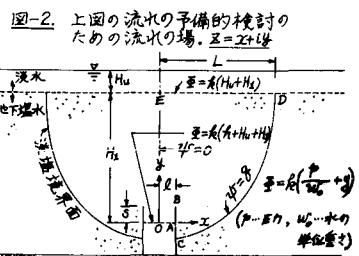
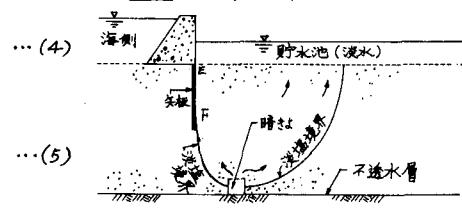
となる。図-4に示す境界条件より

$$\Omega = \Omega_1 + i\Omega_2 = k(H_s + H_u + R) + M \int_0^t \frac{dt}{\sqrt{-t} \sqrt{1-t} \sqrt{C-t}} \quad \dots (5)$$

がえられる。式(1)において

$$\begin{aligned} T^2 &= t = S + i\varphi, \quad A^2 = 1/d, \quad A'^2 = 1 - A^2 \\ \Psi &= \{k(H_s + H_u + R) - \bar{\psi}\} / (2\pi N), \quad \varphi = \bar{\Psi} / (2\pi N) \end{aligned} \quad \dots (6)$$

とおくと $T^2 = SN^2(\varphi + i\varphi, A)$



式(7)を展開したものと式(6)の T^2 の式から

$$S = \left[\{sm(t) dm(\varphi)\}^2 \{cn(t) dn(t) sn(\varphi) cn(\varphi)\}^2 \right] / \{1 - dn^2(t) sn^2(\varphi)\}^2 \quad \dots (8)$$

$$\varphi = 2sn(t) dn(\varphi) cn(t) dn(t) sn(\varphi) cn(\varphi) / \{1 - dn^2(t) sn^2(\varphi)\}^2 \quad \dots (9)$$

がえられる。ただし t および φ に関する母数は A および A' である。

$$\omega_s = \{k(H_s + H_u + R) - \Omega_1\} / (2\pi M), \quad \omega_2 = \Omega_2 / (2\pi M) \quad \dots (10)$$

$$\text{とおくと } T^2 = SN^2(\omega_2 + i\omega_s, A) \quad \dots (11)$$

$$\text{式(12)を展開したものと式(6)の} T^2 \text{の式から} \quad \dots (12)$$

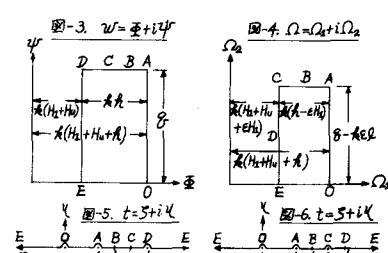


図-3. $\psi = \bar{\psi} + i\bar{\Psi}$

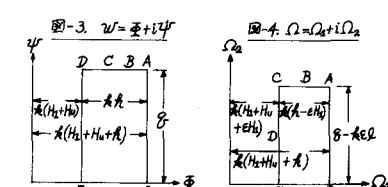


図-4. $\Omega = \Omega_1 + i\Omega_2$

式(12)を展開したものと式(6)の T^2 の式から

$$S = \left[\{sn(\omega_2)dn(\omega_2)\}^2 - \{cn(\omega_2)dm(\omega_2)sn(\omega_2)cn(\omega_2)\}^2 \right] / \{1 - dn^2(\omega_2)sn^2(\omega_2)\}^2 \quad (13)$$

$$q = 2sn(\omega_2)dm(\omega_2)cn(\omega_2)dm(\omega_2)sn(\omega_2)cn(\omega_2) / \{1 - dn^2(\omega_2)sn^2(\omega_2)\}^2 \quad (14)$$

ただし、 ω_2 および ω_1 に関する母数は φ および ψ' である。式(8)に E の条件 $S = \pm\infty$, $q = 0$, $\vartheta = R\theta/(2AN)$

および $\psi' = 0$ を適用すると

$$R\theta/(2AN) = K(a') \quad (15) \quad \text{ここで } K(a') \text{ は } a' \text{ を母数とする第一種積円積分である。同様に } A \text{ の条件}$$

より $R\theta/(2AN) = K(a) \quad (16)$ したがって

$$R\theta/(R\theta) = K(a)/K(a') \quad (17)$$

次に式(13)に E の条件 $S = \pm\infty$, $q = 0$, $\omega_2 = 0$

および $\omega_1 = R(\theta - EH_1)/(2\theta M)$ を適用すると

$$R(\theta - EH_1)/(2\theta M) = K(\psi') \quad (18)$$

同様に A の条件より

$$(R\theta - R\theta E H_1)/(2\theta M) = K(\psi) \quad (19)$$

式(17), (18)および(19)より

$$\varepsilon \frac{\theta}{R} = \frac{K(a)}{K(a')} - \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{K(\psi)}{K(\psi')} \quad (20)$$

式(15)を式(6)の ϑ および ψ' に適用すると

$$\frac{\vartheta}{R\theta} = \left(1 + \frac{H_1}{R} + \frac{H_2}{R}\right) - \frac{\varphi}{K(a')} \quad (21)$$

$$\frac{\psi'}{R\theta} = \frac{\psi}{K(a')} \quad (22)$$

式(18)を式(11)の ω_1 および ω_2 に適用し、式(21)および(22)を用いれば次の二式がえられる。

$$\varepsilon \frac{\psi}{R} = \frac{\varphi}{K(a')} - \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{\omega_1}{K(\psi')} \quad (23)$$

$$\varepsilon \frac{\psi}{R} = \frac{\varphi}{K(a')} - \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{\omega_2}{K(\psi')} \quad (24)$$

2.2. 境界面 各境界面にあっては式(8)および

(13)より、 $F(a, \theta)$ を Δ を母数とする第一種積円積分として

$$E \sim O \text{ 上 } \frac{(-S)}{1-S} = sn^2(\varphi) = sn^2(\omega) = \sin^2 \theta \quad (26)$$

$$\varphi = F(a', \theta), \omega_1 = F(\psi', \theta)$$

$$O \sim A \text{ 上 } S = sn^2(\psi) = sn^2(\omega_2) = \sin^2 \theta$$

$$\psi = F(a, \theta), \omega_2 = F(\psi, \theta)$$

$$A \sim B \sim C \text{ 上 } \frac{d}{d-1} \left(\frac{S-1}{S} \right) = sn^2(\vartheta) = \sin^2 \theta$$

$$\vartheta = F(a', \theta)$$

$$\left(\frac{c}{c-1} \right) \left(\frac{S-1}{S} \right) = sn^2(\omega_1) = \sin^2 \theta \quad (30)$$

$$\omega_1 = F(\psi', \theta) \quad (31)$$

$$C \sim D \text{ 上 } \left. \begin{aligned} \left(\frac{d}{d-1} \right) \left(\frac{S-1}{S} \right) &= sn^2(\varphi) = \sin^2 \theta \\ \varphi &= F(a', \theta) \end{aligned} \right\} \quad (32)$$

$$\left. \begin{aligned} \frac{c}{c-1} &= sn^2(\omega_2) = \sin^2 \theta \\ \omega_2 &= F(\psi', \theta) \end{aligned} \right\} \quad (33)$$

$$D \sim E \text{ 上 } d/S = sn^2(\psi) = \sin^2 \theta, \psi = F(a, \theta) \quad (34)$$

$$d/S = sn^2(\omega_1) = \sin^2 \theta, \omega_1 = F(\psi, \theta) \quad (35)$$

がえられる。

2.3. 未知定数の決定 境界 $A \sim B \sim C$ において式(1)

および(5)より

$$(d\vartheta/dS)_{ABC} = -N/\sqrt{(d-S)(S-1)(S)} \quad (36)$$

$$(d\vartheta/dS)_{ABC} + R\theta (dy/dS)_{ABC} = -M/\sqrt{(c-S)(S-1)(S)} \quad (37)$$

$$\text{上二式より } \left(\frac{d\vartheta}{dy} \right)_{ABC} / (R\theta) = U_{ABC}/(R\theta) = \frac{1}{M \sqrt{\frac{d-S}{c-S} - 1}} \quad (38)$$

また B で U_{ABC} の符号は変わらぬばならぬから

$$\frac{M}{N} = \sqrt{\frac{d-b}{c-b}} = \frac{A}{B} \sqrt{\frac{B^2 - \alpha^2}{B^2 - A^2}} \quad (39)$$

-方、式(15)および(18)より

$$\frac{M}{N} = \frac{A}{B} \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{K(a')}{K(\psi')} \quad (40)$$

式(39)および(40)より

$$\beta^2 = \frac{1}{b} = \frac{\alpha^2 - A^2 \left\{ \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{K(a')}{K(\psi')}\right\}^2}{1 - \left\{ \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{K(a')}{K(\psi')}\right\}^2} \quad (41)$$

さらに、 B では

$$\sin^2 \theta_B = \left(\frac{d}{d-1} \right) \left(\frac{b-1}{b} \right) = \frac{\beta^2 - 1}{A^2}, \quad \vartheta_B = F(a', \theta_B) \quad (42)$$

$$\sin^2 \theta_B = \left(\frac{c}{c-1} \right) \left(\frac{b-1}{b} \right) = \frac{\beta^2 - 1}{A^2}, \quad \omega_{1B} = F(\psi', \theta_B) \quad (43)$$

$$\text{故に } \varepsilon \frac{S}{R} = \frac{F(a', \theta_B)}{K(a')} - \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}\right) \frac{F(\psi', \theta_B)}{K(\psi')} \quad (44)$$

がえられる。

与えられた EH_1/R , $\varepsilon\theta/R$ および $\varepsilon S/R$ に対する基本的未定数は A^2 , α^2 および β^2 の 3 個である

が、これらは式(20), (41)および(44)を連立して

ことによって決定される。計算の過程で若干の試

算を要するがさほどめんどうではない。

2.4. 浸漬境界面と全浸透流量の算定式 基本的

未定数が確定すると、式(23)および(24)にそれ

ぞれ式(32)および(33)を適用すると、式(20)ヒカル

ら浸漬境界面の式は $c \leq S \leq d$ である。

$$\left. \begin{aligned} \sin^2 \theta &= \frac{c}{s}, \quad \sin^2 \theta = \left(\frac{d}{d-1} \right) \left(\frac{s-1}{s} \right) \\ \varepsilon \frac{x}{R} &= \varepsilon \frac{\theta}{R} + (1 - \varepsilon \frac{H_1}{R}) \frac{K(s) - F(s, \theta)}{K(s)} \\ \varepsilon \frac{y}{R} &= - \left(1 - \varepsilon \frac{H_1}{R} \right) + \frac{F(s, \theta)}{K(s)} \end{aligned} \right\} \quad \cdots (45)$$

がえられる。また、浸透流量は単位実行き当たりについて式(17)より求められる。

2.5. 内部流線および等ホテンシヤル線 浸透領域
内部の流線および等ホテンシヤル線を求めるには ω_1 および ω_2 を $0 < \omega < K(A)$ および $0 < \omega < K(B)$ の範囲で任意に与えてこれに対する ω_1 および ω_2 を知れば事足りる。 ω_1 および ω_2 を与えれば式(8)および(9)より λ と η の値が求まり、これを式(13)および(14)に適用して ω_1 および ω_2 を連立にとけばよ。こままで、式(13)右辺の第一項を A^2 、第二項を B^2 とすれば

$$A^2 - B^2 = S, \quad 2AB = \eta \quad \text{が成立するから}$$

$A = \sqrt{\sqrt{S^2 + \eta^2} + S}/2, \quad B = \sqrt{\sqrt{S^2 + \eta^2} - S}/2 \quad \cdots (46)$

となり A, B の値が求まる。また、 A および B の定義より $A \sin(\omega_1) d\omega(\omega_1) \sin(\omega_1) d\omega(\omega_1) = B \sin(\omega_2) d\omega(\omega_2) \sin(\omega_2) d\omega(\omega_2)$

がえられ $C = \left[B d\omega(\omega_2) / (A \sin(\omega_1) \sin(\omega_2)) \right]^2 \quad \cdots (47)$

とあれば $\sin(\omega_2) = \sqrt{(1 + \eta^2 + C) - \sqrt{(1 + \eta^2 + C)^2 - 4S^2}} / 2B^2 \quad \cdots (48)$

ω_2 を仮定すればこれに対して C が求められ ω_2 が求められる。この仮定が正しいかどうかは

$$\text{検査式: } \frac{\sin(\omega_2) d\omega(\omega_2)}{A \{ 1 - \sin^2(\omega_2) \sin^2(\omega_1) \}^2} = 1 \quad \cdots (49)$$

によって確かめられる。このようにして任意に与えられた ω_1 および ω_2 に対する ω_1 および ω_2 が定まればこれに対応する λ および η の値は式(23)および(24)で定められる。すなわち流線および等ホテンシヤル線が画かれる。

3. 計算および実験による検討 次上の解析結果を検討するため $\varepsilon H_1/R$, $\varepsilon L/R$ および $\varepsilon S/R$ に \cdots と \cdots の値を与えて主要な物理量である浸透流量 $\eta/(sec)$, 砂層面での淡水化領域幅 $\varepsilon L/R$ および特異度 C の位置 $\varepsilon \omega_1/R$ などを計算し、その結果を図-13および

図-8に示してある。これらについて若干の検討を行なうと、まず $\varepsilon S/R = 0$ の場合には図-7より、 $\varepsilon L/R$ を一定にして $\varepsilon H_1/R$ を徐々に大きくすると $\varepsilon \omega_1/R$ は徐々に小さくなり、 $\varepsilon L/R$ および $\varepsilon \omega_1/R$ は $\varepsilon H_1/R$ のある値のところまで最大となる。 $\varepsilon H_1/R$ を一定にすると $\varepsilon L/R$ が大きくなるほど $\varepsilon \omega_1/R$, $\varepsilon L/R$ および $\varepsilon \omega_1/R$ は大きくなる。

また、図-8より $\varepsilon H_1/R$ および $\varepsilon L/R$ を一定にして $\varepsilon S/R$ を大きくすると $\varepsilon \omega_1/R$ および $\varepsilon L/R$ は小さくなり $\varepsilon \omega_1/R$ は大きくなる。これらの結果は定性的には充分推論しうることであらうので図-7および図-8の結果からも解析結果は妥当であることが認められよう。

次に、流線および等ホテンシヤル線についても数種のものについて計算し、その一例を図-9に示してある。流線網は式(49)の検査式が0.9999へ1.0001になつたところで出された計算結果を基に画いたものであるが充分妥当に画かれてゐることから検査式の範囲は上述の程度であることが考へられる。なお0.999~1.001の範囲の結果は流線および等ホテンシヤル線とも幾分誤差を生じてゐるようである。このことは他の数例の結果からも云える。数値計算は若干のデータ作成以外全てれ産大電子計算機 OKITAC 5090 によって行なつた。

次に、実験は写真に示しているように最初、過マンガン酸カリウムで着色された淡水で水槽内の砂を完全に飽和しておき、暗室背部に所定の水頭で淡水を注入し塩水を排除して行なつた。淡水注入開始からほほ4時間程度で実験断面と使用した相馬砂の場合においては定常化した。なお、

式(17)に実測の $\varepsilon L/R$ を適用して逆算された相馬砂の透水係数は0.34 cm/secとなり、この値は筆者が他のところでは流れにあって測定してある透水係数とほぼ一致しており、このことからも理論が妥当であると言えよう。

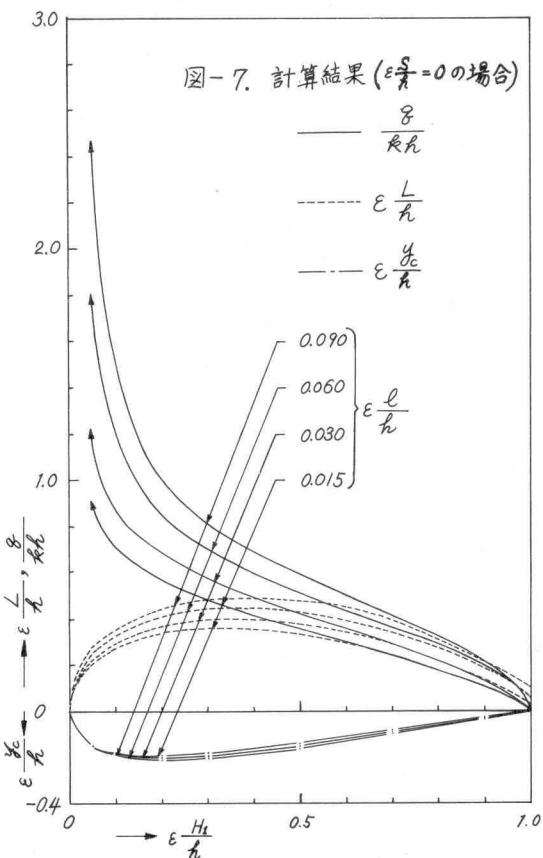


図-7. 計算結果 ($\varepsilon \frac{S}{h} = 0$ の場合)

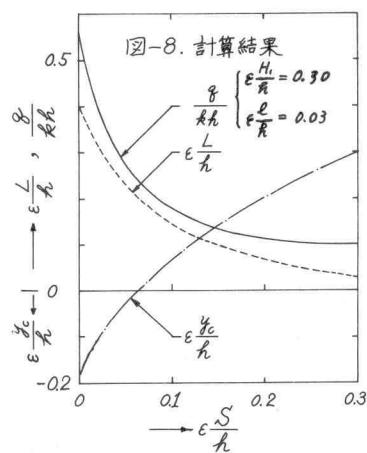
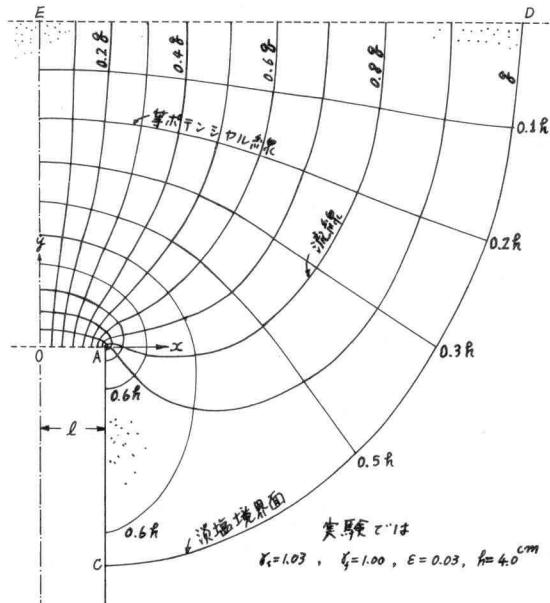


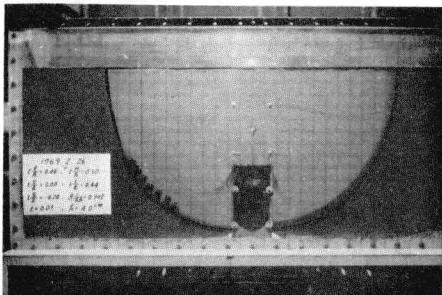
図-8. 計算結果

図-9. 計算結果の一例

$$\begin{aligned} \Delta^2 &= 0.166, \quad \gamma^2 = 0.406, \quad \beta^2 = 1.000 \\ \varepsilon \frac{H_1}{h} &= 0.300, \quad \varepsilon \frac{l}{h} = 0.060, \quad \varepsilon \frac{S}{h} = 0.000 \\ \varepsilon \frac{L}{h} &= 0.440, \quad \varepsilon \frac{y_c}{h} = -0.200, \quad \frac{g}{R_h} = 0.701 \end{aligned}$$



(図-9に示す断面に対する実験結果)



(定常化後2時間、漫水注入開始後6時間の状態)

4. あとがき 本報では図-1に示す流れの予備的流れとして図-2に示す流れを取扱い、若干の検討を行なつたが、図-1の流れについては今後に検討する計画である。実験および計算を手伝つてもらつた九州大学土木教室 中村淳治、道永洋一の両君に感謝申し上げる。